

・主イエスは、ガリラヤにおいて神の国の福音を宣べ伝え始めました。バプテスマと荒野における40日間を通して、人として生きる神の子、人と共に生きる救い主の姿を私たちはマルコ1章のこれまでを通して学んできました。そして、その宣教の始まりの時に、主イエスは弟子たちを招かれたのです。

・主イエスは、神の子であり、力をもっています。癒しの力、宣教の言葉、人々への愛を通して、神の国を宣べ伝えたのです。しかし、罪人と共に生きるというバプテスマ受浸の行為は、彼を文字通り人と共に生きるという生活へと招きました。主イエスお一人で、神の国を宣べ伝えることも十二分にできたかもしれません。しかし、主イエスは、弟子たちを必要とされたのです。共に生きる者、共に宣べ伝える者、苦楽を共にする者を必要とされたのです。人と人との間に来られた（ヨハネ1:14）救い主は、人の力など借りない、必要ないと言われたのではありませんでした。いや、むしろ神の目にとって必要のない人間などいない、ということを実証するために来たのです。神の目に、「あなたは高価で尊い」と私たちが知るために、主イエスはこの世に来られたのです。

・主イエスが訪れた現場は、ガリラヤ湖でした。その現場は、ガリラヤ湖で漁を営む漁師たちの群れにおいて、でした。これから、主イエスが語る言葉を、共に宣べ伝える仲間です。スピーチ上手な者や、世の著名な人々、学者を招くこともできたかもしれません。そちらの方が、沢山の人たちに短い時間で、福音が宣べ伝えられたかもしれません。しかし、主イエスはそうされません。彼は、その当時、ガリラヤ湖においてありふれた職業である、漁師の現場に赴き、その人々の働きをご覧になりました。（16）「ご覧になった」という言葉は、「凝視する」とも言える言葉で、「注意深く、意思をもってそのものを見る」ということです。主イエスは、たまたま漁師をみたのでも、弟子に招こうとも考えたのでもありませんでした。彼らは網を打っていました。生活の資を得る仕事に力を尽くしていました。その様子を自らの意思でご覧になったのです。

漁師になる者は、学を修めるような経歴をもたず、早くから経験を積むために、その仕事についていた人々が多かったでしょう。これだけ勉強してきましたから、魚を沢山獲れる、ということはありません。マニュアル本を読んで、生計が立つのであれば、皆漁師になるはずですが。実践し、経験を積む中で、仕事が成り立つのです。しかし、そうであっても何も獲れない日があることを聖書は教えています。ルカ福音書においては、何も獲れない、とシモンたちが途方に暮れている時に主イエスの言葉によって、収穫を得る弟子の姿が描かれています。彼らはどんなに準備しても何も獲れない時があることを体験的に知っていたのです。嵐にあうこともありました。命がけで、人々の食となる魚を獲っていたのです。そして自然の力に対して、自分の力ではどうにもならないことがあることを知っていたのです。独りでは難しい。複数人で網を打ちました。協力し合い、自然に向き合いながら生きていました。彼らは漁師でした。（16）

・私たちの現場に主イエスが来られ、そして、漁師たちと同じように私たちを見ておられる。そう思った時に、私たちの日々の働きとは一体どのようなものなのでしょうか。漁師で言えば、大漁の時、一定の成功を収め、その成果を主イエスに見てもらいたいという姿でしょうか。

もしくは独りでは厳しい。自分にはもう何もする力がない、という生活の中で陥る虚無感や、あきらめ、疲労の様子でしょうか。漁師で言えば、「何も獲れない」不漁の時。人の力では如何ともしがたい事柄に対して、打ちのめされている姿でしょうか。

これは仕事のことだけではないでしょう。生活の現場—家庭や学校、様々な関係のあるところにおいて、私たちは自分なりに上手くいっている時と、なんでこんなことが…と途方に暮れる時があります。順風な時もあれば、逆境の時があります。それが生きるということです。

主イエスはそのどちらも、ありのままの私を、よくご覧になっています。いい時だけの自分を見てではなく、他者のことで思い悩む時も、病の中で、苦しみの中にある時も、いつも、どんな時も愛の眼差しをもって、私たちをあきらめない、その心をもって、私たちの現場に赴いてくださるのです。私たちの現場を通して、私たちを理解してくださるのです。

・主イエスは、雄弁なスペシャリストや、著名なプロフェッショナルを必要とされたのではありません。漁師がありふれた、つまりどんな人でも目指すことのできる、一般的な仕事であったことには触れました。しかし、主イエスは、このところにある一人を必要とされました。何か特別なことができる、という彼を弟子に相応しい者としたのではありません。むしろ、人々が食する魚を獲る、人々の身近さに生きている者を。多くの人々と同じように生活し、仕事をしているその者を必要とされたのです。後に「ペトロ」と名付けられるシモン、その兄弟アンデレに対して、主イエスはストレートに語るのです。

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(17)

二人は、すぐに網を捨て、主イエスに従いました。次いで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネも、舟の中で網の手入れをしている時に、主イエスの招きを受け、それに応じました。すぐに、彼らは父ゼベダイと雇い人と共に、舟を残して、主イエスの後について行ったのです。その行いは、主イエスの言葉を自分に語られた特別な言葉、福音と受け取ったことによります。この方についていこう！そう決心させる、主イエスの温かさに触れたのです。喜びの内に飛び出していったのです。

・「人間をとる漁師」…この言葉は、ユーモアにあふれています。彼らシモンたちはそんな言葉、そんな仕事があることを今まで聴いてこなかったでしょう。主イエスの語る「わたしについて来なさい」を聴いて、彼らは「自分には、一体どんな仕事があるのか。救い主と共に行って、どんな働きができるのか、」そのような思いを抱いたでしょう。しかし、人間を獲るという働きが、直訳すると、「人間のための漁師」そのような生き方があることを彼らは喜びの内に知ったのです。そして、主イエスにすぐに従ったのです。

このところで、弟子となった彼らが、これまでの漁師として大変大事にしていた道具、網や舟を残していった。捨てていった。そのような言葉が出てきます。父親を残して、と言う言葉もそうです。このところを特に牧師として献身する上で、これまでの全ての関わりや仕事を捨てる。主イエスに従う、というのはそういうことなのだ解釈している人と出会うことができました。私自身も、後ろを振り返らないという、強い思いをいただくみ言葉として解釈してきました。

しかし、このみ言葉は、主イエスと出会い、招かれた人生が、これまでの人生のリセットを意味するものではないということが、牧師として、一キリスト者として生きていく中で新しく示されて

きました。それは過去の栄光や実績にすぎるといえるものではないです。網や舟、父親。これらのつながりを通して、彼らは漁師でした。漁師をする上でなくてはならぬもの、関わりでした。そして今、新しく人間をとる漁師に招かれました。これは弟子たちにとって、また、主イエスに招かれている私たち全ての人たちにとっての新しい網、新しい舟、新しい父がそこには待っているということなのでしょう。隣人との出会いの場、天の父の言葉を聴くその出会いが待っているということなのです。

・ある先輩牧師Aさんが、話してくれたことがあります。この主イエスの弟子になる御言葉を通して、Aさんは牧師に導かれたという方です。Aさんは両親との間に深い断絶を抱えていました。そして、親を残して、と言う言葉に、これまでの両親との関係を断ち切って、主イエスに従うことこそ、大事なのだと、勘当同然で神学校に行くのです。牧師になってからも、両親とは断絶状態。しかし、ある日、この聖書の言葉を読み、新しい天の父との出会いを通して、Aさんは両親のもとを尋ね、これまでの思いの内を語り合い、ゆるしを願い、和解に至ったというのです。人間をとる漁師。その人間とは、誰か。自分が人間をとる漁師になるのだ、とAさんは息巻いていたが、いや実は、自分もその「人間」に含まれている。主イエスに捕えられている。そして、自分の親もまた、その神の慈しみの網の中に入れられている、そうその御言葉がしみ込んでいった時に、Aさんは、両親のもとに向かっていったというのです。この話を聞きながら、もしかすると、Aさんにとって親との断絶状態の方が、悶々としながらもこの御言葉により、「親は捨てて、神に従うのだ」という結論を抱きながら生活する方が、精神的に楽だったのではないかと私は思いました。苦しい過去に向き合うこと、とてつもない勇気がいることだと話しを聞いていて感じたのです。しかし、Aさんは、主イエスによって招かれ、主イエスと共に生きる御言葉と祈りの生活の中で、もう一度網を、あきらめていた命の和解の網を投げてみたのです。ここに、主イエスが招かれ、主イエスが十字架に至る全存在をかけて、為してくださった愛と和解の出来事があるのです。「主イエスが共にいるから大丈夫！」という言葉に生きるのです。これまで大切にしてきたものも、苦しみを受けてきたものをも、新たに向き合う者とされる。これが人間をとる漁師。人間のための漁師の務めなのです。

・私たちの教派、日本バプテスト連盟では、全日制の神学校である西南学院大学神学部への入学者が、2年連続ゼロを記録しています。今年度の神学校献金、皆さんと献げる恵みをいただきましたが、牧師になろうという人は減っています。牧師になっても、食っていけない。夢がない。と思われるのでしょうか。コロナのことがあっても、祈っているだけでは役に立たないと思われるのでしょうか。情熱を傾け、命を燃やすような職業になっていないのではないかと。今、自分の仕事が問われています。そしてそれはつまり、献身者を生み出す教会が問われています。

しかし、希望があります。主イエスが、私たちの生活の場を、絶えず見つめておられ、そして語りかけてくださっているということです。主イエスは「私一人で十分。他人は必要ない」と言われません。「わたしの働きには、あなたが必要なんだ。」といつも語りかけてくださるのです。私たちは、今その語りかけられる言葉に、しっかりと耳を開き、心を開き、受け取りたいのです。応答したいのです。「わたしについてきなさい」・・・主イエスは「礼拝出席者を100人にしろ」とか「バプテスマを100人に授けろ」と言われたのではありません。「わたしについてきなさい」。と言われたのです。

主イエスは「わたしは道である」(ヨハネ)と語られました。「私がゴール」と言われたのではありません。「従う」という言葉は、ギリシア語で「アルコーセオー」という言葉です。「一緒に同じ道をいく」とも訳せる言葉です。主イエスと共にその道歩き続けたい。本日、総会が予定されています。コロナのことがあって延期されていました。感染者拡大の中、今日も話し合うことに緊張があります。しかし、だからこそ、今、互いの言葉を聴くことを大切にしたい。そして主イエスが何と言っておられるのか、そこに一番心を向けたいのです。

新しい執事が選ばれます。祈って覚えていただきたい。執事は、選ばれた人だけの仕事ではなく、漁師のようにチームプレーなのです。祈られてできる働きです。新しい総会のあり方、それはつまり教会形成一伝道や牧会、礼拝一の道を模索していく場も、私たちは必要としています。私たちはいつでも、主イエスに従いたい。これはただ、主イエスの言う事を聴いていればいい、指示を待っていればという生き方ではない。主イエスに対して、信頼の言葉も感謝の言葉も、そして疑問の言葉も、語っていい。語り合いながら道中を楽しむ、その道のりを共に歩んでいきたい。

先週、1つの証しを聴きました。中部連合少年少女会で行っているオンライン・バイブル・ミーティングで高校3年生のHさんが証しをしてくれたのです。彼女は、コロナのことがあり、部活は練習も大会もなく引退。お母さんも病に倒れ、家事を家族と分担。進路のことでも学校が休みになり不安の中、この数カ月を過ごしてきた事を語ってくれました。ただ、その中で御言葉に励まされたこと。名古屋教会の白石牧師のメッセージから、慰められたこと。マタイ6章「明日のことを思い悩むな。明日のことは明日、自らが思い悩む」に心強められたことを大胆に証しをしてくれたのです。」御言葉によって励まされる体験の証し。これがその証しを聴く一人ひとりの慰めとなり、私もその恵みを受けました。主イエスと共に歩む道。人間をとる漁師。それは、神の言葉、御言葉を聴く歩みであり、隣人の言葉をたいせつに聴く歩みです。そして、私が慰められ、希望を受けた言葉を大胆に語ることなのだと改めて教えられました。

「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう」と皆が招かれています。年齢も、性別も、出身も、今就いている仕事も関係がありません。主は、他ならぬあなたを必要としています。もしかして、その道を歩む中で、Aさんのように、辛いことに向き合う、そこに網を投げるような出来事が待っているかもしれません。主イエスが共にいてくださるから、私たちは、勇気をいただき続けたい。主イエスと共に、新しい1週も歩み始めていきましょう！